

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03025

研究課題名(和文) 保育者養成のための「命を育む環境循環型食農フィールド教育プログラム」の開発

研究課題名(英文) Development of food and agricultural education for the students majoring preschool education

研究代表者

谷田 創 (Tanida, Hajime)

広島大学・統合生命科学研究科(生)・教授

研究者番号：20197528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究者は、これまで生き物を用いた「動物介在教育」と「食農教育」の研究に深く関わってきた。それは、幼児から大学生までを対象に、教育に生き物や家畜を介在させることで、日々の食事のあり方や命を食べることの意識、食の源に関する知識と興味を高める効果があるからである。ところが幼児教育については保育者側の「食と農業のリテラシー」が低いので、これまでの研究から、幼稚園等での波及には限界のあることが指摘されていた。そこで本研究では、保育系学部生を対象とし、広島大学の附属農場を活用した食育教育プログラムを実践することで、将来の保育者候補学生の食育リテラシーを高める効果のあることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国では、過度なグルメ志向や栄養の過剰摂取による生活習慣病の急増とともに、まだ食べられる食品の大量廃棄など、享乐的な飽食と食料の無駄な消費が国際的に非難的となっている。一方でわが国の食料自給率はわずか37%と先進国の中では最低である。特に家畜の飼料の多くを輸入に頼っているわが国の牛肉、豚肉、鶏肉の自給率は6%～10%と極めて低い水準にある。つまりわが国の飽食文化は砂上に構築されていると言える。食の生産現場と食の消費地が乖離した現代においてその事実を知る国民は少ない。そこで本研究は、保育者のための食農教育プログラムを開発することで、わが国の国民の農業と食に対するリテラシーの向上に貢献する。

研究成果の概要(英文)：We have been working on the study for "Animal Assisted Education" and "Food and Agriculture Education", because we believe that the educational program targeted kids to university students on animals, agriculture, daily meals has a big impact on improving food and agricultural literacy of the public. However, as food and agricultural literacy of the kindergarten teachers tends to be low, it has been suggested that educational effect on kindergartners is limited. The objective of our study therefore was to develop "Food and agriculture education program" for university students who intend to be kindergarten teachers after graduation. The results of our study suggested that the food and agriculture literacy of the students majoring preschool education would improve by taking our education program held at our university farm which keep dairy cows and sheep.

研究分野：人間動物関係学

キーワード：食農教育 動物介在教育 フィールド教育 酪農 人と動物の関係 食育 保育 幼児教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 背景全般

最近の子どもは、ゲームやネットへの過度の依存により、現実と仮想世界が混同し、自然の中で体を動かしながら生き物にふれて育てる体験や、生き物の誕生と死を肌で感じる体験の場を失いつつある。さらに都市型社会の中での不規則な食生活が、生活習慣病の増加を招いている。中央教育審議会では、幼児期から生き物とのふれあいを通して命の大切さや他者への思いやりを学ばせることを提言し、生き物を通じた保育の重要性を指摘している。特に平成 25 年の答申では、自然体験を通して「生きる力」を育むことが必要であることを明言している。ところが自然体験が不足しているのは子ども達だけではない。近年では、保育者や将来保育者を目指す保育系大学生も、生き物の飼育経験や自然体験を有する者が少ない。その結果、保育者や学生の中には「生き物を極度に怖がる」「生き物の触れ方がわからない」「食べ物がどのような過程を経て作られているのか知らない」「生き物の命に対する意識が希薄になっている」者も存在する(谷田と木場, 2014)。そこで、自然、生き物、食、命を体験的に学ぶ「食農教育」が保育者のために必要となる。

#### (2) 国外の研究の動向

国外ではすでに 1970 年代から、動物行動学、獣医療、心理学、教育学などの分野の研究者によって、生き物とのふれあいが子どもの心身に与える効果について研究し、生き物を介在した様々な活動(AAE: Animal Assisted Education:以下 AAE)の実践につなげており、子どもの学習支援、情緒的問題の軽減、運動不足の解消、精神衛生の向上に貢献することなどが報告されている。また 1970 年代には、米国で「agricultural literacy」(農業リテラシー)という造語が生まれ、農業と直接関わりのない市民に対する食農教育の重要性が指摘されるようになった。2002 年にはバージニア農科大学と米国農務省が、農業と教育を連携させて、「faeis」(Food and Agricultural Education Information System:食農教育情報システム)を立ち上げ、保育者や教師を対象とした食農教育プログラムの研究が実施されている。

#### (3) 国内の研究の動向

一方、国内では、本申請者らが幼稚園・保育園の飼育動物を通じた「幼児のための動物介在教育プログラム」を開発し、その教育効果を検証するとともに、保育における生き物との関わり方についての基準を策定した(谷田と木場, 2014)。さらに、「食育」については、2006 年に日本食育学会が設立され、幼児のための栄養や食生活に関する研究が進みつつある。ところが、米国のように、保育者や保育系大学生を対象とした「食農教育」に関する研究はほとんど存在しない(谷田と木場, 2014)。

#### (4) 広島大学附属農場のこれまでの取り組み

広島大学瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター西条ステーション(農場)以下広大農場)は、2010 年に教育共同利用拠点農場として文部科学省から認定を受けた。全国で認定を受けている大学附属農場は、広島大学を含めて 8 大学のみである。認定に伴い、保育系と農学系大学生を対象として家畜を介在した「保育系学部生のための食育フィールド科学演習」を夏期休暇中に 3 泊 4 日で開講している。いずれの演習も、乳牛、肉牛、綿羊、山羊の飼育体験を通して、食と農業の関係、命の恵み、家畜の福祉について教えている。家畜(動物)の福祉の定義は「人間が動物を利用することを前提とした上で、動物が心身ともに健康で幸せになるように適切に飼育すること」である。

### 2. 研究の目的

食事とは、命を食べることを通して命を育む「命の循環」を象徴する行為であり、単なる栄養素の摂取活動ではない。ところがわが国では、食品偽装や不正流通など食品が利潤追求のための商品と化し、「食の源:命」と「食卓」が乖離しているため、幼児期から食を通して命の尊厳を涵養することが喫緊の課題である。そのためには幼児期に、食の源から食卓までの過程を体験的に学ばせる食農教育が必要であるが、幼児の育みを担う保育者や保育系大学生の食農リテラシーは意外と低い。そこで本研究は、保育、教育、心理、栄養、動物介在教育、獣医療、農学、動物看護、動物福祉の文理双方の専門家が有機的に連携することで、「保育者養成のための命の尊厳を涵養する動物介在型食農フィールド教育プログラム」を開発することを目的とする。

### 3. 研究の方法

#### (1) 研究場所

研究期間(平成 28 年度~平成 31 年度)の 4 年間に、広大附属農場で研究を実施した。広大附属農場の教育関係共同利用拠点の 2 期目認定期間は平成 31 年度までである。研究期間内に、「保育系大学生のための命の尊厳を涵養する食農フィールド演習(以下、「保育系学生食農演習」)」を広大農場において開講した。広大農場では、約 90 頭のウシ、約 30 頭のヒツジ、約 40 頭のヤギ等を飼育し、うち搾乳を行う乳牛は常時 25 頭程度を保有している。また、本拠点教育では、

酪農を中心としているために、4頭同時に搾乳が可能なシステムと牛乳保存器を備えているほか、国内の大学で広島大学と酪農学園大学だけが設置している搾乳ロボットや乳成分分析装置を整備している。本拠点では、家畜から生産物の製造までの流れを体験させる必要があるため、ハム等の肉製品を製造する設備、及び乳の調整からヨーグルト、チーズ、アイスクリーム等の乳製品を加工するまでの設備も整備している。

#### (2) 平成28年度～平成29年度の方法

平成28年度～平成29年度は演習を実施して、受講生に演習後にアンケート調査を行い、その結果をもとにPDCAサイクルを用いることで教育内容の改善を行い、「保育者のための命の尊厳を涵養する動物介在型食農フィールド教育プログラム」の内容の精錬を図った。PDCAサイクルの実施にあたっては、保育、教育、心理、栄養、動物介在教育、獣医療、農業、動物看護、動物福祉等の異分野研究者が連携協力体制を構築した。

#### (3) 平成30年度～平成31(令和元年)年度の方法

平成30年度～平成31(令和元年)年度は、本教育プログラムの教育効果を検証した。平成30年度の教育効果の検証では、「保育系学部生のための食育フィールド科学演習」(夏期休暇中に3泊4日)に保育系大学生38名(4大学)が受講した。またその比較対象として、「酪農フィールド科学演習」(夏期休暇中に3泊4日)を受講した農学系大学生34名(6大学)のデータも分析に用いた。調査項目は、動物福祉に対する意識調査に加えて、YG性格検査、酪農知識テストの3種類であった。意識調査の質問数は43問で、全て5段階のリッカート尺度による選択式である。各質問は、動物福祉、動物の権利、実験動物、野生動物、動物の屠殺、遺伝子の改変、宗教儀式と動物に関連する内容であった。演習の受講前後で同じ意識調査を実施した。YG性格検査は120問からなる質問紙法形式で、結果を12尺度で測定して5典型に分類した。性格検査は演習の受講前に実施した。酪農知識テストは29問で構成された。演習の受講前後で同じテストを実施した。データの分析には、カイ二乗検定、フィッシャーの正確確率検定、ウィルコクソン符号順位和検定、マン・ホイットニーのU検定、スピアマンの順位相関係数を用いた。平成31年度の教育効果の検証では、「保育系学部生のための食育フィールド科学演習」(夏期休暇中に3泊4日)には保育系大学生27名(3大学)が受講した。またその比較対象として、「酪農フィールド科学演習」(夏期休暇中に3泊4日)を受講した農学系大学生29名(8大学)のデータも分析に用いた。酪農に関するリテラシーの変化を調べるために「酪農知識テスト」を、また動物福祉に対する意識の変化を調べるために「動物福祉に対する意識アンケート」を演習の前後で実施した。「酪農知識テスト」は酪農及び乳牛に関する基礎知識30問で構成された。「動物福祉に対する意識アンケート」の質問は43問で、全て5段階のリッカート尺度による選択式である。質問は、動物福祉、動物の権利、家畜や実験動物の利用、野生動物の管理、動物の屠殺、遺伝子の改変、宗教儀式への動物利用等に関連する内容であった。データの分析には、カイ二乗検定、フィッシャーの正確確率検定、ウィルコクソンの符号順位和検定、マン・ホイットニーのU検定、スピアマンの順位相関係数を用いた。

### 4. 研究成果

#### (1) 平成28年度～平成29年度：教育プログラムの精錬

受講生に対する受講後アンケート調査の結果の抜粋によると、「先生方が研究の観点から説明し、技術職員の方が実際の経験から様々な説明をしてくださったため、広い観点から同一のものを捉えることができ理解が深まった」「全体を通して自分の身体を使い、現地の声を聞きながらの実習はとても理解しやすく、現状の問題を肌で感じたことで心に大きく印象に残った」「実際に動物と触れ合える機会を多く用意してくださったことで、自分の興味や視野を広げることができた」「子どもに生きていく中で何が大切なのか、考えていくのかを手本となって教えていく立場になる中で、動物の命の大切さを学ぶことができた」「多くの人の考えを知ることができ、普段できない体験や授業を通して、今まで知らなかったことや分野外で学んだことを自分たちの保育・教育で生かせると思う」などの意見が寄せられた。また、他大学の利用に引率した教員からの聞き取り調査では、「成績の悪い学生もいたのですが、皆、本人なりに頑張る姿を見せてくれましたし、事後指導への参加も熱心でした。広島大学での経験は大きかったし、参加出来て良かった。今でも目を輝かせて話しています」「自分の大学の授業では見せない学生たちの姿に考えさせられました」「広島大学の食農教育プログラムに参加したことによって触発され、幼児が食べ物の命に気がつくことに関したテーマの卒業論文に取り組みたいという想いを強くした学生がいました」などの意見が聞かれた。さらに異なる大学の学生を混在させたグループで活動するように班分けをしたことで、学生間のコミュニケーションが促進されたとする評価とともに、大学間交流が活発にできたという評価であった。また、演習中に担当教員や担当技術職員に質問することが必要となるように演習プログラムを工夫したので、演習を通して積極的に質問ができるようになったとする受講生の回答が多かった。また、演習実施前に綿密にスケジュールの立案と調整をしていたので、タイムスケジュール通りに各演習を遂行することができた。受講生からも、スケジュールの時間割が現実に即したものであったので、慣れない内容の演習ではあったが、スムーズに受講することができたとの意見が多くあった。また近年は夏季の気温

がかなり高いので、日中の屋外演習ではこまめに休憩を挟むように配慮した。その結果、体調不良の受講生は一人も出なかった。一方で改善点としては、講義や実習において、教員や技術職員が解説する専門用語が難しくわかりづらいとの声もあった。そこで畜産や農業を専門としない受講生でも容易に理解できる教育方法とテキストの作成が必要であることが判明し、平成 30 年度以降のテキストに反映させた。また、演習の最終日に実施する課題発表会の準備に、オンラインを利用した情報収集をさせると、受講生の取り組む姿勢が受動的になるため、あえて手書きのポスター発表形式とし、情報源として、農業、環境、食料、家畜、動物福祉に関する様々な参考書を受講生のために準備して自由に閲覧させ、ポスターの構成も各班の創造性にまかせた。その結果、課題発表会における受講生間の質疑応答が活発となり、発表会に対する受講生の評価も高いことが明らかとなったので、平成 30 年度以降の演習でもこの方式を取り入れることとした。さらに、近年の傾向として、初対面の学生と集団で生活することを苦手とする学生が大幅に増加している。そこで、宿泊施設である広島大学の研修センターに担当教員だけでなく TA も宿泊することで、生活面においてもきめ細かなサポートができることが明らかとなった。以上の改善点すべてを平成 30 年度からの教育プログラム内容の改善に生かすこととした。

## ( 2 ) 平成 30 年度～平成 31 年度：教育効果の検証

平成 30 年度については、保育系大学生 31 名と農学系大学生 32 名を教育効果の分析の対象とした。動物福祉に対する意識は、動物の愛護の心の育みとも関係することから、特に保育系大学生にとっては、将来の園における飼育動物との関わりに影響すると考えられた。受講前後共に、保育系と農学系大学生の間に有意差 ( $P < 0.05$ ) があり、保育系大学生の方が動物側の視点に立った意識を示し、農学系大学生の方は反対に人間側寄りの意識を有する傾向にあった。また受講後に保育系大学生の動物福祉に対する意識がいくつかの質問で有意に変化した。「人間の食べ物や衣服の生産のための動物飼育」に対しては、受講後に肯定感が有意 ( $P < 0.02$ ) に高くなったが、「利益に特化した家畜の開発 (遺伝子操作など)」については否定感の方が有意 ( $P < 0.001$ ) に高くなった。このことは食育の現場にも大きく影響すると考えられた。一方で農学系大学生は 43 問中 42 問で有意な変化が認められず、唯一「動物園における動物の教育的利用」にのみ、否定感が有意 ( $P < 0.04$ ) に高くなった。このことから、保育系大学生は演習に参加するまで農業関連体験が少なかったのに対して、農学系大学生は所属大学における授業や経験を通して農業における動物利用に対してある程度意識が固定化していたのではないかと考えられた。また、農学系学生は家畜生産の立場から現場感覚で動物を見ていることが示唆された。受講後に受けた酪農知識テストは、両受講生ともに点数が上昇したが、特に農学系大学生の成績の方が有意 ( $P < 0.002$ ) に高い傾向にあった。

平成 31 年度については、酪農知識テストにおいて、農学系大学生は 30 問中 23 問で演習後に正答率が有意に向上し ( $P < 0.01$ )、総合得点も有意に向上した ( $P < 0.001$ )。一方で保育系大学生は 30 問中 27 問で演習後に正答率が有意に向上し ( $P < 0.01$ )、総合得点も有意に向上した ( $P < 0.001$ )。演習前のテストでは、農学系大学生の点数の方が保育系大学生よりも有意に高かった ( $P < 0.05$ )。演習後のテストでは、逆に保育系大学生の点数の方が農学系大学生よりも有意に高くなった ( $P < 0.01$ )。以上の結果から、平成 30 年度から平成 31 年度にかけて行った PDCA サイクル活用の効果が教育にも現れていたものと考えられた。専門分野の違いによって向上の度合いは異なるが、農学系の分野の大学生でも演習を受講することで、酪農や乳牛に対するリテラシーが有意に向上することが明らかとなった。動物福祉に対する意識アンケートについては、農学系大学生が 43 問中 6 問で有意な意識の変化が認められた ( $P < 0.05$ ) のに対して、保育系大学生は 43 問中 10 問で意識の変化が認められた。例えば農学系大学生は「動物の体内にホルモン剤などを埋め込むことで中性化すること」「断尾や抜爪など動物の体の一部を切除すること」「動物の体に焼印を入れたり耳尾に切れ目を入れたりして動物を識別すること」に対して演習前はやや否定的であったが演習後は若干ではあるが否定感が解消された。一方で保育系大学生は、「実験や研究で動物の行動を観察すること」「動物の福祉や動物の健康増進のために実験をすること」に対して演習後にさらに肯定的に、また「動物にとって必要な食べ物や水を取り上げること」「動物が休息するために必要な環境を取り上げること」に対して演習後にさらに否定的になる傾向を示した。ただし、演習前も演習後も一貫して、農学系大学生の方が保育系大学生よりも動物の利用全般に対して有意に肯定的であった ( $P < 0.05$ )。このことは平成 30 年度と同様の傾向であったことから、本演習の受講とは関係なく、そもそも保育系大学生と農学系大学生の間で動物観に違いがあるものと考えられた。

## ( 3 ) まとめ

広島大学農場を活用した食農フィールド教育プログラムは、大学生の専門分野の違いに関わらず、酪農に関するリテラシーを高める効果が認められた。その中で「保育者養成のための命の尊厳を涵養する動物介在型食農フィールド教育プログラム」は、食育や動物を介在した保育に携わる可能性がある保育者を対象とした演習内容を想定して開発したが、保育者の園児に対する

教育的影響の大きさや、将来の我が国における食生活の変化を考えると（谷田と木場，2014）、今後さらに様々な保育の場面を想定した演習内容へのバージョンアップを図ってゆくことが重要であると考えられる。

#### 引用文献

谷田 創、木場有紀、 保育者と教師のための動物介在教育入門、岩波書店、2014、216

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 谷田 創, 岩本 彩, 妹尾あいら, 木場有紀	4. 巻 51
2. 論文標題 わが国の大学馬術部の現状と今後の課題 - 大学馬術部に求められるものとは -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6. 最初と最後の頁 78-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 妹尾あいら, 木場有紀, 窪田浩和, 谷田 創	4. 巻 16
2. 論文標題 広島大学附属農場 (教育関係共同利用拠点) が他大学向けに開講する食農フィールド演習の教育効果の検証	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学大学院生物圏科学研究科瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター報告	6. 最初と最後の頁 14-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/46555	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村尾信義, 谷田 創	4. 巻 54
2. 論文標題 スワブによる小型犬の唾液採取技術の検証	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Animal Behaviour and Management	6. 最初と最後の頁 59-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.20652/abm.54.2_59">https://doi.org/10.20652/abm.54.2_59</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 村尾信義, 谷田 創	4. 巻 23
2. 論文標題 動物看護師の日常業務における動物の保定技術に関する質 問紙調査 - 保定時における動物看護師の安全対策について-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Veterinary Nursing	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 妹尾あいら, 木場有紀, 谷田 創	4. 巻 15
2. 論文標題 地域の子供達のフィールド教育を目的とした教育施設「カントリーファーム」の設立に関する研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島大学大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター報告	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 窪田浩和, 妹尾あいら, 谷田 創	4. 巻 15
2. 論文標題 教育関係共同利用拠点(広島大学)が開講するフィールド科目におけるセンター技術職員の教育的役割	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島大学大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター報告	6. 最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Aira Seo, Hajime Tanida	4. 巻 21
2. 論文標題 Three-year route census study on welfare status of free-roaming cats in old-town Onomichi, Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Applied Animal Welfare Science	6. 最初と最後の頁 203-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.1080/10888705.2017.1379401	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 伊崎翼, 小川景子	4. 巻 12
2. 論文標題 個人の愛着スタイルが排斥・受容手がかりに対する注意配分に及ぼす影響,	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 広島大学大学院総合科学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 杉本温美, 菊田千景, 川西(朝岡)正子	4. 巻 7
2. 論文標題 各種澱粉粒の電界放出形走査電子顕微鏡による観察(その2) 酵素分解後のトウモロコシ澱粉ならびにジャガイモ澱粉について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本応用糖質学会誌	6. 最初と最後の頁 155-164
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山下久美	4. 巻 35
2. 論文標題 保育者養成課程における子どもの自然体験活動の意義-東洋英和女学院大学と横浜市の共催による「もりっこ」活動を事例にして-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋英和女学院大学人文・社会学論集	6. 最初と最後の頁 83-98
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岩本 彩, 谷田 創, 小川 景子, 木場 有紀	4. 巻 46
2. 論文標題 大学馬術部における幼稚園児を対象とした馬介在教育プログラムの試み	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ヒトと動物の関係学会誌	6. 最初と最後の頁 68-74
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Morita, Y., Ogawa, K., Uchida, S.	4. 巻 9
2. 論文標題 Napping after Complex Motor Learning Enhances Juggling Performance	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Sleep Science	6. 最初と最後の頁 112-116
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -



〔学会発表〕 計25件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 妹尾あいら、高宮佑華、朱 奇、辻 春希、木場有紀、谷田 創
2. 発表標題 広島大学附属農場において夏期集中食農演習を受講した保育系及び農学系大学生の動物福祉に対する意識の変化
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会 第25回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 松井美佳、木場有紀、妹尾あいら、高田憲治、尾崎夏美、橋本 昭、谷田 創
2. 発表標題 幼稚園児を対象とした動物介在教育における子供から保護者への知識の伝達効果の検証
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会 第25回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 角本 咲、井川未結、宇根本愛華、柴崎梨紗、馬場孝三、平井孝史、神原優樹、南野 幸、妹尾あいら、谷田 創
2. 発表標題 高校生のための馬を介在させた教育プログラムの効果に関する研究II
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会 第25回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山下久美、谷田 創、木場 有紀、窪田 浩和、沖田 美紀、川西 正子
2. 発表標題 広島大学附属農場における「保育系大学生のための食農フィールド教育プログラム」の開発 - 保育学生の食意識 -
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 落合進、大道香織、前徳明子、山下久美
2. 発表標題 保育者の望む自然リカレント講座 6
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川西正子、辻森萌
2. 発表標題 保育園、こども園における魚食教育の試み
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 辻森萌、川西正子、老田紀子
2. 発表標題 保育園における継続的な食育活動の実践
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chiho MYOJIN, Toshiyuki KOHRI and Masako KAWANISHI
2. 発表標題 Development of Nutrition Education Program for Kindergarten Children focused on Cooking Activities
3. 学会等名 Hawaii International Conference on Education 17th Annual Conference Abstracts (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小川景子
2. 発表標題 夢を見る仕組み - 生理心理学の視点 -, 市民公開シンポジウム 「身近で役立つ心理学」
3. 学会等名 中国四国心理学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高田 憲治、木場有紀、谷田 創
2. 発表標題 園児の森での活動とリスクマネジメント 動物介在教育を通して
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木場有紀、高田 憲治、谷田 創
2. 発表標題 幼稚園の森にやってくる野生動物の観察を通じた園児のための動物介在教育の実践
3. 学会等名 日本保育学会 第71回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 村尾信義、川田 菜、久保悠加、三村龍二朗、谷田 創
2. 発表標題 ラベンダー精油の匂いによる 採血時のイヌのストレス軽減効果
3. 学会等名 応用動物行動学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 尾崎夏美, 谷田 創, 木場有紀, 妹尾あいら, 高田憲治, 橋本昭
2. 発表標題 園児への動物介在教育が保護者に及ぼす効果に関する研究
3. 学会等名 第24回ヒトと動物の関係学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和泉航貴, 枝川皓亮, 岩本 華, 西迫 風夏, 神原 優樹, 宮崎 幸, 谷田 創
2. 発表標題 高校生のための馬を介在させた教育プログラムの効果に関する研究
3. 学会等名 第24回ヒトと動物の関係学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川西正子, 米田恵美子
2. 発表標題 保育園における継続的な食育活動の実践～子ども・保護者・保育者への影響～
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会講演要旨集
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 窪田浩和, 木場有紀, 山下久美, 川西正子, 沖田美紀, 谷田 創
2. 発表標題 広島大学附属農場を活用した保育系大学生保育系大学生のためのため食農フィールド教育
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会講演要旨集
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川西(朝岡)正子, 明神千穂, 岩城啓子, 藤田修三, 山守誠
2. 発表標題 もち及び低アミロース小麦粉の糊化特性と食品への適用
3. 学会等名 日本応用糖質科学会H29年度大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山下久美, 谷田 創, 木場有紀, 窪田浩和, 沖田美紀, 川西正子
2. 発表標題 保育学生の食意識と食農フィールド教育
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会講演要旨集
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 黒瀬安寿加, 木村夢有未, 貞金望, 秦友花, 村尾信義
2. 発表標題 飼い主によってイヌの入院時に持ち込まれる私物に関する調査
3. 学会等名 日本動物看護学会第39回関西地区第9回
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 村尾信義, 谷田創
2. 発表標題 動物福祉に配慮した小型犬種のための唾液採取技術の検討
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 尾崎夏美、谷田 創、木場有紀、高田憲治、橋本 昭
2. 発表標題 野生動物、家畜、犬（伴侶動物）との関わりを通じた園児のための動物介在教育の実践に関する研究
3. 学会等名 ヒトと動物の関係学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小川景子
2. 発表標題 レム睡眠時の急速眼球運動に伴う脳活動（脳波）
3. 学会等名 日本睡眠学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 高田奈美、川西正子、老田紀子
2. 発表標題 3歳児の給食食材を主媒体とした食育活動とその評価
3. 学会等名 日本保育学会平成28年度大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中道麗華、米田恵美子、川西正子
2. 発表標題 保育園から食育情報の発信～保育園児保護者に及ぼす影響～
3. 学会等名 日本保育学会平成28年度大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岩本 彩、山下久美、木場有紀、谷田 創
2. 発表標題 文科省認定大学農場における保育者養成食農フィールド教育
3. 学会等名 日本保育学会平成28年度大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 村尾信義	4. 発行年 2016年
2. 出版社 インターズー	5. 総ページ数 154
3. 書名 小動物の実践保定法・応用編	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	七木田 敦  (Nanakita Atsushi)  (60252821)	広島大学・教育学研究科・教授   (15401)	
研究分担者	木場 有紀  (Koba Yuki)  (30610703)	帝京科学大学・教育人間科学部・准教授   (33501)	
研究分担者	川西 正子  (Kawanishi Masako)  (20221038)	近畿大学・農学部・准教授   (34419)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村尾 信義 (Murao Nobuyoshi) (20542062)	倉敷芸術科学大学・生命科学部・講師  (35311)	
研究分担者	妹尾 あいら (Seo Aira) (30825360)	広島大学・統合生命科学研究科・助教  (15401)	
研究分担者	沖田 美紀 (Okita Miki) (30611842)	広島大学・統合生命科学研究科・助教  (15401)	
研究分担者	小川 景子 (Ogawa Keiko) (70546861)	広島大学・総合科学研究科・准教授  (15401)	
研究分担者	山下 久美 (Yamashita Kumi) (80410158)	東洋英和女学院大学・人間科学部・准教授  (32718)	